

常磐松文庫蔵『鷺流狂言伝書〈間之記〉』十四冊・解題

山 本 和加子

本稿は、本誌第七く九号に掲載した『鷺流狂言伝書〈間之記〉』（翻刻）に続く、その内容の解説を行うものである。したがって、『間之記』の本文や曲名下の巻序・曲順の引用等については、先稿の翻刻を踏まえており、その参照を前提としている。本学常磐松文庫蔵『鷺流狂言伝書』のうち、『間之記』と仮称した十四冊は、その書誌的考察（本誌7号、竹本氏解題）によって、宝永く享保（一七〇四く一七三五）の「伝右衛門系統の古本を中核として、同派所属の役者の手で、江戸末期頃にそれに増補する形で集成」された鷺流の間狂言台本であると考えられる。そして、本書は数多くの稀曲を収めており、しかもそこに型付・衣裳付等の演出を記した曲が少なくない。そのような内容は、能の変遷と共に間狂言の詞章や演技が流動して、その後各流派で固定化する傾向の一端を示しているのではなかろうか。とすれば、本書は鷺流の間狂言台本として資料的価値が高いといつてよからう。

以下『間之記』について、前稿の解説を参照しつつ、その特色を検討する。また、所収曲の特徴にも言及する。

一、『問之記』と笹野堅氏旧蔵「野中氏間の本」

さて、本書が笹野堅氏旧蔵の鶯伝右衛門系統の間狂言本であることは、すでに竹本氏の調査（本誌6号）によって確認されているが、改めてここで「能狂言の本文」（『文学』昭和十八年十月号）に紹介された「野中氏本」（以下「野中本」）と本書の関係を記しておきたい。

笹野氏の解説を引用すれば、野中本の全容は、①全十四冊・仮綴じ横本である、②書名は「脇能間」「問之記」「三番目間」で、その下に巻序を記している、③各冊に目録があつて全一四四曲だが、④「東方朔・蟻通」の本文はなく、その一方で⑤「土童・菊慈童」の本文が追記されていたり、⑥各曲の末に装束・小道具・作り物の付記がある、⑦「俊寛・二人祇王」の末に享保年間の注記がある、⑧大半の冊は同筆だが、まったく別筆の冊や両筆の冊があつて、複数の筆跡が混在する、といったものである。これに対して、常磐松文庫『問之記』全体の冊数・冊順、及び所収曲目とその配列、また注記の類いは、すべて笹野氏が御指摘された野中本のそれと一致している。但し『問之記』には、さらに異文の「草薙・佐保山・御裳濯・空蟬」の重複曲（全一四九曲。目録のみ1番・重複曲12番。実際の所収曲は一三六番）や、神社考証・宝永の年数書などが「白楽天・白髭・大社・松尾・草薙・厳島・御裳濯」の七曲に追記されている。また、笹野氏が引用した付属文書（所在不明）によると、この『問之記』は、吉見儀助が増補した吉見家伝来の間狂言本の改装残欠本であり、一般に「野中本」と呼称されているが、野中儀右衛門は吉見家伝来の間狂言の台本を一時借覧していただけであつて、むしろ「吉見本」と呼称すべきとの竹本氏の御指摘がある（前掲解題）。

そこで、これらの御説に導かれて、本学現蔵の『問之記』の内容を考察したい。

二、『問之記』と『宝暦名女川本』

【宝永・享保の年記について】

『問之記』には、宝永三年の年数書が七例、享保十七年と十九年の年記が二例ある（多くは別筆曲）。この点、管見に入った問狂言伝書の中では、やはり伝右衛門系統の問狂言本とされている檜書店蔵驚流狂言伝書（宝暦名女川本）の『羅葛部』に、本書と同様の年数書が付記されている。よって本書は、その当時の伝右衛門派の問狂言本と何らかの関係があると考えられよう。この修羅物と葛物の語リアイを集めた『羅葛部』に関しては、永井猛氏が「驚流『宝暦名女川本』について（上・下）」（『観世』昭和51年10・11月号）と「驚流『宝暦名女川本』について——補遺——」（『能研究と評論』12号）において、次のように御考察されている。

A、問狂言台本には、『羅葛部』と背書されている。

B、修羅物・葛物の五十曲の語リアイを所収する。

C、過半の曲に、宝永三年迄の年数書がある。

D、『羅葛部』一冊は、笹野氏旧蔵『名女川六右衛門問之本』四冊と一群の問狂言本であり、散佚本が三冊程度あるために、『宝暦名女川本』の問狂言本は、全八冊だったらしい。

Dにいう『名女川六右衛門問之本』は現存しないが、笹野氏の「古本能狂言・問につきての研究——驚流本——」（『書誌学』昭和12年11月）によると、『名女川六右衛門問之本』には年数書の類いはないようだが、享保く安永頃の上演記録が見え、特に享保・宝暦の時期の記事が少なくない。この宝永三年の年数書や享保の年記は、前述の如く『問之記』にも見られる。そうだとすれば、本書は、『名女川六右衛門問之本』を中心とした『宝暦名女川本』の影響下にある問狂言本と考え

られる。すなわち『間之記』の旧本の中核には、伝右衛門家の弟子家であった名女川家の間狂言本の『宝暦名女川本』が想定できよう。

【番外曲の所収について】

また、この『宝暦名女川本』全体の筆者は、名女川家五代目辰三郎（？～一七七七）であったとの指摘が、永井氏によってなされている（前掲論文）。そして、能楽資料集成7所収の『萬聞書』の概説では、（イ）宝永三年の年数書が多いのは、三代目名女川六右衛門（一六七五～一七五九）が徳川五代將軍綱吉によって廊下番に召し出された年であり、（ロ）家芸の絶えることを恐れた三代目が子孫のために家書を整理した時期がこの頃と思われる、（ハ）宝暦九年前後の名女川辰三郎筆の『宝暦名女川本』であっても、その内容は一世代前の記事が主体であり、（ニ）そのような名女川家伝来本を書写・増補・編纂したのが辰三郎であった、とされている。この六右衛門が辰三郎のために書物をまとめた期間は、六右衛門が綱吉に御廊下番として、六代將軍家宣には御時圭之間番として勤仕した年代でもあった。綱吉・家宣の能狂いについては、表章氏の『能楽の歴史』（岩波講座能・狂言Ⅰ）と「能の変貌―演目の変遷を通して―」（『中世文学』第三十五号）に詳細な御論考がある。両編の参照によって、徳川綱吉・家宣両將軍の所望による城内での稀曲上演の流行と、稀曲・珍曲を演ずる能役者の士分登用が少なくなかったことは、明らかである。そうした稀曲好きの綱吉・家宣時代を反映して、辰三郎がまとめた『宝暦名女川本』の間狂言台本全冊（『羅葛部』や前掲『書誌学』記載の「六右衛門間之本」）には、数多くの番外曲が収められているのであろう。

そして、この『間之記』も稀曲（30曲）が記述されている。儀助が増補した「間の本」に何回の集成増補が行われて、現存の『間之記』が出来上がったかは不明である。しかし、この『間之記』が多数の番外曲を記載する点は、『宝暦名女川本』以来のことであったと思われる。

三、吉見儀助と名女川家

『間之記』の原態になる吉見儀助本の成立は、江戸時代末期とされている。これは、笹野氏が『文学』誌上に引用された本書の伝来を記した半紙に、嘉永三年の吉見儀助の署名があることに拠っている。さらには、竹本氏が御考察された通り、嘉永・安政頃の成立らしい『狂言記』（常磐松文庫蔵『驚流狂言伝書』中の狂言台本）の本文が、『間之記』の主な筆跡と共通することからも考えられる。そこで、江戸末期における吉見・名女川両家の関係について確認したい。

吉見・名女川両家の関係は、岡田紫男氏「叢柏屋漫筆」（『能楽』明治40年5月号）や永井氏の論考（前掲「一補遺」論文）に詳しい。まず岡田氏によると、吉見儀助は狂歌師紀定丸（一七六〇～一八四一）の男で、素人だが、十代目鷺伝右衛門（一八一五～一八六五？）を取り立てたり、名女川家九代目庄三郎（一八二〇～一九〇三）を仕込んだ人物とされている。永井氏は、紀定丸父子がいずれも儀助といたので、天保五年に装丁された宝暦名女川本の『本書綴外物』の装丁者「大道笑人」を父の紀定丸とし、また鴻山文庫蔵『寛政天保名女川六右衛門番組控』（寛政六年～天保十一年間の番組を記載）の中に、「吉見鉄吉」が綴じた名女川家文書（番組控）があると紹介されている。さらに永井氏は、これを収めた帙に書き付けられている江島伊兵衛氏の「儀助ノ定丸ノ弟鉄吉が名女川及伝右衛門ヲ取立テタルカ」「又考フ、吉見儀助ハ定丸ナレドモ、ソノ子吉見鉄吉又儀助ヲ襲名シタルナラン。然ラバ、本書ニアル鉄吉、即吉見儀助トナリ」の考証と、石川弥一氏の『山口に残存する驚流狂言』（昭和32年）の解説に、安政五年四月二十二日に山口の狂言師の春日庄作が、吉見鉄吉、野中儀右衛門、名女川栄四郎、名女川庄三郎の後見で、鷺寛太郎から伝授を受けたとあって、安政五年に吉見鉄吉が健在であることから、この鉄吉は紀定丸の息子かとしつつも、定丸との関係は不明とされている。

これら両氏の御説に従えば、前述の本書の伝来を記した半紙の「嘉永三年庚戌氷室ひらきてあくる日小十人松前三郎兵

衛組吉見儀助（花押）」に署名されている儀助は、紀定丸の子の儀助であつたかと思われる。また、前出の江島氏の書付には吉見家の「天保五年ノ催ニハ、伝右衛門出勤シ、鉄吉モ出勤シ居リ、辰三郎モ出勤ス」等の記述もあつて、いずれにせよ吉見家と名女川家に密接な関わりがあつたことに間違ひなからう。なお鴻山文庫蔵には名女川家所持の幕末の番組『幕末明治期能・狂言組』もあり、その中の「嘉永元年長州邸能組」に、名女川庄三郎と鉄吉（「吉川」と付記されているが「吉見」の誤写か）の名が見られる。

常磐松文庫が所蔵する『間之記』は、その詞章・追記から考えて、鷺流の別家伝右衛門家の弟子筋にあたる名女川家で書写された間狂言本（『宝暦名女川本』）の流れを汲む「間の本」であろう。そして、吉見儀助が増補集成した『間之記』の原本が名女川家の間狂言本であるならば、さらに庄三郎が儀助に師事していたことなどの吉見家と名女川家との間柄を考え合わせるならば、吉見家伝来の『間之記』の増補集成に際しては当然、儀助だけでなく、江戸末期の名女川家を代表する庄三郎、或いは庄三郎周辺の、名女川家に縁のある人物も関わっていた可能性もあろう。

四、『間之記』の特色——他の鷺流間狂言伝書との比較——

間狂言（間とも）は、能一曲の中で狂言方が担当する役とその演技の総称であり、語リアイとアシライアイに大別できる。二場物の能で前シテが退場した後シテ登場までの間をつなぐ語リアイは、シテが演じる役に関わる物語を語り聞かせるもので、能の梗概や主題を再説・補足解説するのが主な役目である。一方、アシライアイは、シテ・ワキと交渉して能の展開に加わっている。つまり、能の筋書きが間狂言のセリフ・演技を決定するから、『間之記』がどういった内容の伝書であるのかを、他の鷺流の間狂言伝書の本文との比較によって明らかにすることは難しい。しかし、鷺流の間狂言本としての『間之記』の特色を番外曲を多く収めるという以外で考えるには、本文の検討が重要と思われるので、次に『間之

記』を底本とした校合結果を、若干述べたい。

現存する『羅葛部』と『問之記』を比べると、分散以前の吉見家伝来『問之記』の祖本の一つは『宝暦名女川本』と思われるが、直接の関係までは見い出せない。この『問之記』と『羅葛部』の同一所収曲は十三曲だが、双方の詞章を比較して見ると、全体的に『羅葛部』の詞章の方が『問之記』よりも読解しやすいようである。例えば〈定家〉の「辺土の山野、改行、京までも」は「辺土の山谷深谷の地競迄も」、「内親王は□□□□」は「科ナンボウ非ス」、「程なく□□」は「オリテ」、「言ひ懸るか」とは「はいかゝるか」となどのように、『羅葛部』では『問之記』の空白部分にふさわしい語句が記されている。また、底本の〈遊行柳〉は同筆で二種（九ノ十〇／一〇）の語リアイを記載しているが、これは『羅葛部』の「近代語間ヲ云」（九ノ十〇）と「立間ハ前方ハ相勤候。今ハ大方語間ニスル」（九ノ一一）に相応している。ただ、同じく二通り詞章が記載された曲であっても、〈葛城〉では、底本の本文は〈雪葛城〉と称する方に一致し、〈巴〉は専ら義仲のことを内容とした『羅葛部』の何れとも違った文句（巴の武勇譚）を記す場合もある。そして、『羅葛部』の〈空蟬〉は「基ニモ用ル」とあるように、両曲のアイに併用可能としているので、その詞章は底本『問之記』と大きく違っている。さらには、

1、『問之記』の訂正前の巻数に「原巻序二十二」までを記しているが、『宝暦名女川本』の間狂言（「名女川六右衛門問之本」）は推定八冊で、そこには巻数の記載がない。

2、『宝暦名女川本』の間狂言本で唯一詞章が現存する『羅葛部』の各曲は、内題下に漢数字を記しているが、本書の「三番目問九」の別筆（12行書）の曲目中、〈浮船・定家・采女・葛城〉等に朱書されている漢数字と一致していない。

3、宝永の年数書に関して、本書の〈浮舟〉に記述はないが、『羅葛部』の〈浮船〉に「〇年ふともかわらじ物か橋

のト正本ニ有○源氏ニハ年ふとも……」「横川小聖トハ恵心僧都ノ御事、中ノ宮ノ伯父。宝永三年迄ニ六百九十三年」とある。また、主要な手で記されていた本書《遊行柳》に年数書はなかったが、『羅葛部』の同曲の末尾には西行法師の「法師」の読み方や西行に関して系譜等、そして「○右兵衛尉、法名圓位、後改西行。東鑑ニ云、保延三年八月、遁世年八拾一、年代記ニ宝永三迄、五百九年ト有リ」と記されている。

の三点からも、残欠本の『問之記』が記す本文は『羅葛部』の完全な臨模でなかったと言えよう。

それから、『問之記』が『宝曆名女川本』系の問狂言伝書に基づいて伝右衛門系の数種の別本を混綴した問狂言台本であることは、別筆の曲目や冊が存在して、「原卷序二十二」とあること、付記の類の多さ、重複曲の異文や校訂の表記があることから想像できたが、この点は驚流問狂言伝書の本文校合からも裏付けられる。殊に、九州大学所蔵の問狂言本『問彙』と『問之記』には、多くの共通点が見られる。『問彙』は全六冊（特殊演出の替間を含めて二百二十四曲所収）であり、〈富士山・住吉詣・定家・空蟬・二人静・千引・簪入自然居士〉の七曲を除外すれば、現存の『問之記』が記す曲をすべて収めている。この両本の記事については、「六、所収曲諸伝本一覽」（後掲）で記したほぼ同文と認められる中で、とりわけ詞章・演出記等に至るまで一致しているものが少なくない。

例えば、『問之記』の協能（主に別筆分）の〈九世戸〉の文殊が伊邪那岐尊・伊邪那美尊の御作等を補説、〈玉津島〉の衣通姫と和歌の道のことや〈玉嶋川〉の神功皇后と玉嶋川の鮎のことなどは、他の驚流（大蔵・和泉流を加えて）の問狂言本と比べて、『問彙』と底本の両書が記述する独自異文と考えられる。また〈厳島〉の「妙軸を玉顚し」という意味不明瞭な箇所は、『問彙』も同文で「本之マ、」と傍注されている。しかもこれら〈玉津島〉〈玉嶋川〉〈厳島〉や、或いは〈孫思邈〉〈鶴若〉〈鳶窟〉などは、管見した驚流の問狂言伝書に限れば、この二書のみが所収する曲でもある。そして、詞章や演出の注記を同じくする曲（〈白楽天〉〈籠祇王〉〈葛城天狗〉等々）が大半である。しかしながらその一方では、

『問之記』より『問彙』に詳細な型付や異なる詞章・演出法（〈弱法師〉〈葵上〉〈雲雀山〉〈巴〉〈昭君〉等々）や衣裳付（〈檀風〉）などが記されていたり、その逆に『問彙』の詞章が簡単に型付等の注記もない（〈江の嶋〉〈雨月〉〈護摩〉等）などの相違点もある。また、『問之記』特有の文句（誤字を含む）が『問彙』にはなく、訂正されている場合もあり、その書写態度は一概でなかったようである。

とは言え、『問之記』の〈籠太鼓〉の文句は、『問彙』が記載する二種類の詞章のうち、「同」とある方に等しく、しかもこの「同」の記述には「右ハ名女川庄三郎ワザ書共、口傳ノ書ヲ騰寫ス」と注されているので、『問彙』も鷺伝右衛門家・名女川家に関わる問狂言本かと推測される。

『問之記』は、改装残欠本であるために一見雑多な編纂となっており、またその文句や型付の類には必ずしも強い独自性が見られない。しかしながら、こうした『問之記』と問狂言諸本の異同によれば、『宝曆名女川本』以来の鷺流問狂言の特色と、また鷺伝右衛門家と不可分の関係を知ることでもきよう。

なお今回の調査では、鷺流の問狂言伝書中、本書だけが〈簀入自然居士〉を収めていたが、『名女川六右衛門問之本』は「たゞ常の會釋問の一冊ほどのものを缺いてゐるのが如何にも残念である」（前掲笹野氏『書誌学』）ということなので、『宝曆名女川本』に〈簀入自然居士〉のアシライアイが収められていた可能性はある。また、『問彙』と『羅葛部』に修羅能の問狂言が約十曲余り記載されているわけで、能の登場する問狂言の台本である以上、『問之記』にも、修羅物の問狂言を収めた冊があったと考えるべきであろう。

五、吉見家伝来の狂言伝書について・補遺——早稲田大学演劇博物館蔵の狂言台本——

【安田文庫蔵『鷺流「夜討曾我」「石橋」問狂言セリフ』・翻刻】

ところで、『問之記』の本来の冊数や収めた曲目数が『宝曆名女川本』や『問集』に匹敵するの否かは明らかでない。それでも現存する百五十曲以上を収める問狂言台本であろうことは言えよう。就いては、早稲田大学演劇博物館の安田文庫に所蔵される問狂言台本の一つが、常磐松文庫蔵『問之記』からの分かれらしいので追加したい（翻刻に際しては、前稿の凡例に準ずる）。

安田文庫蔵『鶯流「夜討曾我」「石橋」問狂言セリフ』（資料番号イ11-00749）の一冊は、〈夜討曾我・石橋〉の二曲を収めた、縦118×横117（ミリ）の仮綴じの横本型の問狂言台本である。蔵書印は、「安田文庫」「演劇博物館図書」である。その料紙は楮紙で、折り目を下にした半折の料紙は『問之記』と同寸であり、楮紙と共の裏表紙だけで表紙はない。「夜討曾我」（第一丁オ）の内題の左側に「大藤内」とあって、この曲の替アイの名称が付記されている。〈夜討曾我〉（簡単な衣装付・型付あり）は『問之記十三』にも記載されている重複曲だが、詞章内容に異同がある。その筆跡は『問之記』の主な本文と同筆であり、却って『問之記』所載の〈夜討曾我〉が別筆であることから、安田文庫の〈夜討曾我〉は『問之記』の集成増補前後に脱落した分の一曲といえよう。〈石橋〉は、『問之記』に収められていない曲目である。四人の「天狗」が登場して、寸劇を演ずる型付と「語り」の詞章が記されている。さらには「同替」として、「仙人」が大体同じ内容を一人で「触レ」る立シャベリアイも記す。

《翻刻》

夜 討 曾 我

大 藤 内

ヲモ カルサン、箔壺折、女帯、ヒトヨギリ、エボウシ。

アド 狂言上下、嶋、小サ刀。

早鼓。

ヲモあゝ悲しや、ア、く

アドやい、是は何としたやい

ヲなふく助てくれい、あゝ悲しや

ア是に

先、氣をはつきりと持しませ

ヲア、今少ト氣がついた、してわごりよハ何として爰へ来たぞ

アイや、そなたが

あハたゞしう泣さけんではへ出るに依て、何事じやと思ふて、是迄付て来た

ヲよし夫ならバ、客子をしるまい

アなか／＼身共ハ様子をしらぬ程に、先氣を鎮めて、子細があらバ語つて聞せい

ヲ誰も跡から追てハ来ぬか

アイや／＼誰も跡から来ぬ

ヲじやア

ア中々

ヲ先夫で氣が落付た。扱も／＼夥しい事が有ハ

ア何と

した事ぞ

ヲ子細をとつくりと咄いてきかせう

ア中々、急で咄さしませ

ヲ先曾我の十郎祐成・五郎時宗、父の河津の三郎祐重を伊豆国赤沢に於て工藤祐経がねんなふ付し程に、其妻子ハ他国へ有付しゆへ、河津が二人の子を曾我の十郎・五郎と名付。此兩人、親の敵を打んとおもひ、野にふし山にふしねらふ所に、祐経ハ果報いミじくましますにより、仮初の御通りにも数多郎等を召連らるゝ故に討事もならず。年月を送りしが、此度ふじの御符をよき幸ひと思ひ、随分と心を付たれ共、よいすき間もなふてむなく帰り、今夜ねらふを祐経ハ夢にも存ぜられいで、某といかにも心よふ酒宴をなし、遊女をあつめ、帯ひもを解、前後を知らず、休れた。身共なども殊の外酒にハよい、跡先の差別もなふ寐入つて居たれば、大かた夜半の比でもあらふか、かの兄弟の奴が忍び込での

ア是ハして何とした

ヲそこで兄弟の者がいふ事へ、いかに祐経、大事の敵を持たながら、か様にふかくぬるものか。おきよ／＼と、あゆみの板

をどうぐと踏ならいた。祐経もさすがの人なれば、心得たと詞を合せ、枕元におゐた刀を追取て起上らふとせられた所を、なふく悲しやなふ

ア何とした

ヲ早切付おつた

ア扱もく気の毒な事じや

ヲされバ其事じ

や。すけつね殿もつねくそなたのお知やる通り、身共を心易ふなされたに依て、某へ内々おしやるにハ、其方の知た通り、某ハ敵を持た。和御料ハづと頼母敷人じや程にかういふ。自然、彼兄弟の者がふん込で狼藉をするならば、其方能様に働ひてくれい。此事が気掛りなほどに頼むと、くれぐおしやつたに依て何が某も見捨られハせまいと思ふて、身共も刀をおつ取てかゝらふとしたれば、兄弟の者ハ水のたる様な刀を抜て、真黒に成て、切て掛るに依て、某も是非に及ばず、取かへしおちた

ア扱其方ハ、あぶなひめに逢ふたなふ

ヲいやそこで身共も原ハ逃なんだ。詞を掛た

アなんと言てかけたぞ

ヲ今夜の夜打の輩ハ、曾我兄弟の者共じや。其証抛、人ハ大藤内と呼バつたれば、兄弟の

者が言様ハ、たどのかバ逃さんと思ひしに、きやつをも切れ逆、稲妻の如くに追掛おつた。身共もやるまい。はや切らるゝか、早斬らるゝかと思ふて、先是迄やうく逃て来たれば、わごりよに逢ふた

ア扱もく夫はあぶない事じや、

してそなたの手に持た、なんじや

ヲ是はいかな事、なふくうろたへた事でハないか。刀を持つたと思ふたれば、

ヲ某ハきもが潰れて手にか

なハぬほどに、そなた、帯をしてくれさしませ

ア心得た

此内、色々口伝アリ。

ア此様に取乱すといふ事が有物か

ヲいや身どもも取あへず肝がつぶれたに依て、此体じや

ア扱もくそなた

ハ夫程迄にうろたへると言事が有物か。してどこもけがハせぬか

ヲいや、うしろがどふやら痛む様な。何ともない

ヲなんじや、

か見て呉さしませ

アどれく是ハ如何な事

ヲ何としたぞ

アしたゝかな瘡があるハ

きづがある

ア中々

ヲ夫ハ誠か

ア誠じや

ヲあゝ悲しや夫成バ、おれハ死ふも知れぬ。あゝ助けて

呉れい、く、あゝ

アド、脇ヲ向、笑テ、

なふく偽じや、疵ハないぞ

ヲなんじや、疵ハない

アあふ扱

ヲなんぼうそなたがだまいても、うしろ

が殊の外痛い アいやそなたが餘り臆病な程に、だまいた。何ともないぞ

ヲはて、わごりよハ夫成バさふと最

前に言てくれいで、大きに肝を潰いた、なんともないの

アド、幕の方ヲ見テ、

やアくそこでさはぐハ何事じや。何じや、兄弟の者が是へ切て出る。夫ハ誠か、是ハ如何な事

ヲなふく何とい

ふぞ アいや、兩人の者が唯今は切て出るといふハ

ヲ何じや、兄弟の者が是へ切て来る。ア、悲しや。身共

を連てのいてくれい

アイヤ、そなたにかまふて居てハ、身どもが成ぬ。某ハ先へのくぞ

ヲア、悲しや、先待、

某を置てどこへのくぞ。ひとつに連て、のひてくれい。ア、悲しや、なふく、是ニ捨殺しにするか。ア、悲しやく、

く、く。

石 橋

影向の時節も、今いく程によも過じ。

是ハ此他リ近き深山に住天狗にて候。

四人、咳払い。シカく有テ、

先大日本国大江の定基といわれし人出家し、今ハ寂乘法師となり、此度入唐渡天し、この石橋に望む。去程に、国大世^{土か}界に於て橋のあまた有りとはいへど、中にも此石橋と申ハ人の掛たる橋にてハなし。唯おのれと出生したる橋にて、其長

三丈に及ぶ。横の狭さ尺にも足らず、せばく、そりたる所を物にたとふれば、虹のふきたる如くにて、雲に聳へて、底ハ霧深ふして見へがたし。如何程有も知れがたし。瀧の音ハ雲より落る如くにて、嵐に響きおびたゞし、橋の上ハ苔むして滑かなる所も有といへり。されバ此橋に望ミ、向ひを見渡せば、目くれ、肝つぶれ、腰もたゞず、足もふるへ、なか／＼人間の分にてハ渡る事ハ成がたし。されバ、向ひは文珠の浄土にて、常に花ふり音楽聞へ、目前の奇特さま／＼なれば、我も／＼と望ミをなせども、橋を見てハ肝をつぶし、渡らんといふ者吾人もなし。いか成貴僧・高僧達も此橋のもとにて難行苦行をして渡るといふに、今の寂乗法師ハ身命を仏意に任せ渡らんといふ程に、ちとあれへいで、魔の来迎をなして妨げふと思ふが何と有う。

是より常之通り。

仏法さまたげ、小天狗ハ寄合て、かの旅人の信心を起さんハ、魔の来迎をなして、我道に引入んと談合申せば、もし仏罰にて後光のひかりが我身の熱鉄と成やせん。その上天狗ハ鼻長き、阿弥陀が妹脊が爪はじきの、あたらぬさきにはづさんと、／＼、夕間にかきくれて失せけり。

同 替

か様に罷出たる者ハ、他リ近き深山に住居する仙人にて候。去程に我等の是へ出る事、別の事にあらず。爰に青龍山と申て、我ら如きの者迄も望ミなせども、いまだ叶はず候。夫をいかにと申に、国土世界に橋の数あまた有りとハ申せ共、中にも此石橋と申ハ人の掛たる橋にてハなし。唯おのづから出したる橋にて、其長さ三丈あまり、横のせばきハ尺にも足らず、せばく、反たる所を物を譬ふれば、虹のふきたる如くにて、雲に聳へて見へたり。下ハ霞深うして見へがたく、いか程ありとも知れがたし。瀧の音ハ雲より落る如くにて、嵐に響きおびたゞしく、橋の上ハ苔むしてなめらか成所もありといへり。此橋に立、向ひを見渡せば、目くれ、肝つぶれ、腰もたゞず、足もふるへ、中／＼人間の分にてハ成がたし。

されば、向ひハ文珠の浄土にて、常に花ふり、音楽聞へ、目前の奇特さま／＼なれば、我も／＼と望ミをなせ共、橋を見て肝をつぶし、渡らんといふ者老人もなし。されども難行苦行して渡ると申。某の分にてハ難行苦行は成まい。さりながら、いつも橋のもとに座して向ひを拝ミ申。今日も参ふと存じて、是迄罷出た。先そろり／＼と参ふずる。誠に年寄らずバ、難行苦行致して成とも渡りたい事なれ共、左様の事ハ思ひもよらぬ事で御座る。是ハ早、程なふ橋のもとに参つた。誠にかう見渡した所がげん／＼として物凄しき所にてハ有よ。然らバ、いつもの如く橋のもとに座して向ひを拝まふと存ずる。

ヤア／＼其許のどゞめくハ何事ぞ。ヤア／＼じゃ。いや／＼此様子所に長居をして、若獅子の勢ひに当つて怪我ぞしてハ成舞。急でのこふと存る。唯のけ／＼。

【早稲田大学演劇博物館狂言台本について】

また『早稲田大学演劇博物館所蔵 特別資料目録5 貴重書 能・狂言篇』（竹本幹夫・監修）によると、安田文庫所蔵の狂言台本の中には前出の間狂言伝書以外にも、常盤松文庫蔵の『鷺流狂言伝書』の主な筆跡と同筆の鷺流の狂言伝書があるので追記して置きたい。それは、『鷺流狂言語』『鷺流狂言廉々心覚』『鷺流狂言并間習事年数位付』である。この三冊については、同目録の備考欄に「実践女子大学蔵『鷺流狂言伝書』とものと一群であろう。名女川辰三郎系の伝書か」と記述されている。

なお『鷺流狂言語』の所収曲は、「松語／同・竹語／同、弓語・矢語、鷹之語・雁金之語、牛の語り・馬の語、松の語・ゆづりは語、枕物狂、朝比奈語り・語りの留、大黒ノ語り、八嶋間那須の語、蛭子の語・毘沙門語、文蔵語斗りいふ時、留の言葉」である。『鷺流狂言廉々心覚』は、「末広かり、鼻取角力、二千石、栗焼、鈍太郎、素袍落、萩大名、八幡前、

名取川、靱さる、千鳥、鏡男、栗田口、内沙汰、合セ柿」といった曲の文句と型の要所を、曲ごとに記している。

六、所収曲諸伝本一覧

以下に、常磐松文庫蔵『間之記』が収める曲を五十音順に配列し、校合した鷺流の間狂言伝書との異同状況を一覧する。伝本略号は、「鴻山」鴻山文庫蔵『元文四年本間久近筆鷺流間狂言附』・「能研A」『鷺流狂言型附遺形書』・「能研B」『鷺流間狂言伝書』・「能研C」『鷺流能間』・「水野」水野文庫蔵『鷺流間の本』・「九大」九州大学蔵『間彙』・「檜」檜書店蔵『鷺流狂言伝書・羅葛部』としている。そして、記載事項については、○は小異でほとんど同文、△は文句に異同があるものの基本的内容は同じ、×はまったく異なるもの、主に詞章より型付中心の場合を◇で表す。また重複曲や数種のセリフが収められている本では、各々の校合をまとめて記して置いた（「」は、目録記載のみの曲）。

曲名	鴻山	研A	研B	研C	水野	九大	檜	曲名	鴻山	研A	研B	研C	水野	九大	檜
ア愛染川	○	△			○	○		葵	上	○	○		○	○	
阿漕	○	◇			○	○		朝顔		×			×	○	○
芦荊	△	◇	△	△	○	○		海人	○	○			○	○	
淡路	○			×	○	○		〔蟻通〕							
イ敵島					○	○									
ウ鶺鴒	◇	○			○	○		浮船	△				△	○	○
雨月		△	×	×	○	○		空蟬	○	◇	△	△	△	×	○
善知鳥	×			×	○	○		采女	○	◇	○	○	○	○	○

																	曲
高野物狂	コ皇 帝	源大夫	ヶ現在 鶴	車僧	九世戸	ク草 薙	キ切兼 曾我	邯鄲	鉄輪	葛城	カ花 月	小原御 幸	オ大 社	絵馬	エ江の 嶋	浦島	名
○								○	△	△	○	△					鴻山
◇	◇		◇	△		△		◇	◇	◇	×	△	△				研A
								◇	◇		△	○				○	研B
		△	△	△	△								×	△	○	○	研C
○	△	△	△	△	△	×	○	△	△	△	○	△	○	△	○	○	水野
○	○	○		○	○	△	○		○	○	○	○	○	○	○	○	九大
						○				○							檜
																	曲
小鍛冶	護摩	元服曾 我	弦上		熊坂	国栖	金札	感陽宮	神有月	葛城天狗	春日竜神	大蛇	鬼黒		烏帽子折	名	
		○			○	○		△									鴻山
◇	△	△	◇		◇	○		◇		○	○	◇	△		○		研A
△						△		○							○		研B
△			△				×			△	○	△					研C
○		△	△		○	○	×	△	△	○	△	△			×		水野
○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		九大
																	檜

チ 千 引	檀 風	玉 津 嶋	竹 の 雪	タ 大 会	ソ 孫 思 邈	殺 生 石	セ 誓 願 寺	ス 須 磨 源 氏	白 髭	昭 君	俊 寛	シ 志 賀	三 笑	鷺	サ 西 行 桜	小 蝶	小 督
	△		△			○					○	×			○	△	○
△	△		△	△		◇	◇	◇			○		◇	◇	○	◇	◇
	◇					◇					△		(◇)		○		◇
				△			×		△			△				△	
○	△		△	○		○	×	×	○		○	×	△	△	○	△	△
	○	○	△	○	○	○	△	○	○	△	○	○	○	○	○	○	△
							○	○								○	

調 伏 曾 我	丹 後 物 狂	玉 嶋 川	大 木		禪 師 曾 我	是 界	住 吉 詣		正 尊	春 栄	舎 利		佐 保 山	斎 藤 五	護 法	小 袖 曾 我
	△				○		○		△	○	○		×			△
◇	×	×				◇	◇		△	○	○			△	○	△
									○	△	◇					
													×			
△					○	○	○		○	○	○		×		○	△
○	○	○	○		○	○			○	○	○		○	○	○	△

十七一五 驚流狂言伝書『間之記』

曲名	土蜘蛛	鶴若	テ定家	ト藤栄	道明寺	木賊	巴	ニ錦木	ヌ鶴	ノ野守	ハ白楽天	橋姫	鉢の木	ヒ常陸帯	百	フ豊干	藤渡
鴻山			○	△			△	○	○	○					○		△
研A	◇		◇	×				○	○	◇			◇		○	◇	◇
研B				◇									◇		◇		◇
研C	×		○		△		×				△		△				△
水野	△		○	△	△	△	×	○	○	○	○		△	△	△	×	△
九大	○	○			○	△	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△
檜			○				×	○									
曲名	土車	天鼓	〔東方朔	融	鳶窟	鳥追	鶏立田	箱崎	橋弁慶	班女	雲雀山	富士山	伏見				
鴻山		○		○		×				△	○						
研A	△	◇			×		◇		◇	△	○						
研B										◇							
研C	△	△	△					△				△	△				
水野	△	○	△	○		×	△	△	△	△	○	△	×				
九大	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○		○				
檜																	

口籠祇王	輪藏	リ竜虎	ラ羅生門	吉野静	ヨ夜討曾我	ユ遊行柳	ヤ山姥	モ盛久	ム聶入自然居士	ミ三山	満中	松尾	マ巻絹	仏原	ホ放下僧	舟橋	二人祇王
				△			○	○			△		○		○	○	△
×		×	◇	△	×	◇	△	◇		◇	△		○	◇	△	◇	△
							△	◇					○		×		
	△	×	△		△			△		×		×		○			○
	×	×	△	△	△	×	○	○		△	△	×	○		△	○	○
○	○	○	△	△	○	○	○	○		△	○	○	○	○	○	○	○
						○				△				○			
籠太鼓		呂后		弱法師	吉野				室君	御裳濯		松虫	枕慈童		放生川		二人静
△												△					
×		△		◇					◇								
					△					×					◇		
△				○					△	△		○			×		×
○		○		○	○					○		○	○		○		

本稿を成すにあたり、竹本幹夫先生はじめ月曜会の諸氏より多くの御助言を賜った。資料の閲覧は、法政大学能楽研究所・早稲田大学演劇博物館の御世話になった。また、演劇博物館には、資料掲載の許可を頂いた。合わせて、深くお礼を申し上げる。